

社会福祉法人グリーンローズ

「ことば」の教室
オリブ園
インクル

第42回
東北電力作文コンクール
入賞 秀賞

新しい年



第四十二回東北電力作文コンクールにオリブ園
卒園児の須田小雪さんが秀賞を獲得し入賞しました。
ぜひ読んでみてください。

壁を乗り越えてつかんだ幸せ

秋田県大仙市立仙北中学校

三年 須田小雪

世の中は、様々な「音」であふれている。人々の会話や笑い声、悲しんでいる音などいろいろある。それらは毎日聞く音だ。しかし、「もし世の中の『音』が聞こえなくなったらどうなるのだろう」と考えたことはないだろうか。人は耳が聞こえなくなると、どんな気持ちになるのだろうか。それを知るには実際に耳の聞こえない人に聞くか、あるいは自分で耳をふさいで体験してみることがないだろう。

ただ、「聞こえない」という「壁」は想像を上回るほど辛いものだということはある。なぜなら、私がその「壁」を現在も経験しているからだ。

私が四歳だったとき、大きな音に反応するものの、母が呼ぶ声には反応しなかった。そこで秋田市にある総合病院で調べてもらうと、「感音性高度難聴」ということがわかった。私はほとんど記憶がないが、おそらく両親はかなりショックだった。初めての子どもが耳が聞こえないのだから。この四歳の時点から十年以上かかって今の私があると思つと、信じられないという気持ちである。

小学校に入学した私に、サポートの先生がつくことになった。不安なこともあったが、ゆっくり学校に慣れていった。そのころ、友達に「耳につけてるのって何」と聞かれたことがある。はつきりとは覚えてはいないが、確か「補聴器っていつんだよ」と言っただ。ただ、「耳につけてるものを見せて」と言われたことは鮮明に覚えている。他の人の耳にはないものをつけている私が、友達には珍しかったのかもしれない。

しかし、私が小学校四年生のとき、「先生からサポートを受けているから、怒られることがない。成績もいいし、えこひいきされている。ずるい」と友達から陰口をたたかれた。さらに、友達が蹴ってきたり、わざとぶつかってきたりした。いじめだ。「どつしてみんなからいじめられなきゃいけないの。補聴器をつけている

からの。」と複雑な気持ちだったし、そう思う自分に葛藤もしていた。しかし次の日も学校で蹴られて、私は辛くて母に告白することにした。母は私の話を聞いてくれ、学校に連絡してくれた。

その後、学年が変わると私に対するいじめがなくなった。どうやら母の電話を受け、五年生の頃の担任の先生とサポートの先生が、私をいじめていた人たちに指導してくれた。そうだ。いじめがなくなると、心につつかえていたものが取れたかのように自然と気持ちが落ち着いていた。また、補聴器をつけていることにはたいする、葛藤もなくなっていた。

私が現在通う中学校には二つの小学校の生徒が入学する。だから、入学時、他の小学校の子と一緒に過ごすことは不安だった。しかし考えていたよりも恵まれた環境、そしてたくさんいい先生方に出会うことができた。「辛いこともたくさんあったが、それらを乗り越えてきたから今の私がある。今が人生で一番幸せかもしれない。たくさんの人に感謝したい。」と最近、今までのことを考えて思うようになった。私を理解してくれる先生方、友達などいろいろの人に感謝している。中でも一番感謝しているのが母だ。

「ここまで来るのに十一年かかったなあ。耳が聞こえないって分かったとき頭の中が真っ白になったけれど、『だからこそ、この子達のことを一人前に育てよう』と強く思ったんだよ。」と母は中学生の私にこう話してくれた。私は自然に涙が出ていた。私には妹がいるが、妹も補聴器をつけている。私自身、これまで大変だったと思っていたけれど、難聴者を見たことも聞いたことも、もちろん育てたこともない父や母は、何もかもが初めてで、毎日本当に大変だったのだろう。そんな父や母が今までに私に言ってくれた言葉や、してくれたこと、叱ってくれた言葉を思い出さずだけで、どんなに私のことを考えてくれたかが、今ようやく分かった気がする。私がここまで成長できたのは、父と母のおかげである。

今私は中学二年。まだこれからの人生は長い。そんな長い人生の中には、これまで立ちふさがった「壁」以上の「壁」が出てくるかもしれない。しかし、私は次の壁も乗り越えられるはずだ。どんな「壁」が私を立ちふさがうとしても、いつも私を側で応援し、助けてくれる人がいるのだから。だから私はいつも前を向いて、胸をはって生きていこうと思う。

裏面もありますよ!

何かありましたら誰にでも連絡・相談

E-mail olive@kodomo-sekai.com
ホームページ http://www.kodomo-sekai.jp

新年あけましておめでとう

昨年の年が明けたと思ったら、あっという間に新年になってしまいました。昨年一年、子どもたち、保護者の方々、いかがでしたでしょうか。子どもたちの成長について心傾け、子どもたちとの心の交流が深まったことを強く願っております。

新しい年も、子どもたちの思いや成長がしっかりと保護者の方々に届くよう願っております。子どもたちは生活の端々にたくさんの元気を見せてくれます。そんな子どもたちの幸せ感についてしっかり受けとめてほしいと思います。これは子育ての中の基本です。子どもたちにとって、家族の元気さや笑顔が成長の大きな栄養です。それでも生活ですから、時には悲しみや苦しみがあると思います。そうしたことを含めて共に歩いていきましょう。そして、さあ新年です。

今年度上半期を振り返って

新しい園舎が誕生し、そこでの活動が始まりました。新しい園舎に慣れるまで今少し時間がかかっているように思います。この園舎は、グループの部屋、相談の部屋、個別の部屋、その他教材室、制作室検査用具収納室、絵本の部屋、聴力検査室、食堂などがあります。いっばいに活用してもらいたいと願っています。オリブ園での支援も子どもたちにとって楽しいものであれば、成長につながります。また、積み重ねも大切です。子どもたちには家庭や保育園・幼稚園もあり、これらすべてが大切な場所と考えています。オリブ園で学んだことが、日常の生活に活かされ、持てる力をいっばいに出せるように見守っていきましょう。

社会福祉法人グリーンローズ 理事長 後藤進

紹介
本の

「発達障害の素顔」 山口真美(やまぐちまさみ) 講談社ブルーバックス

オリブ園ではこれまでできるだけ「発達障害」ということばをつかわないできました。落ちつかない子、こだわりの強い子、人との関わりが苦手な子、特定の学習が難しい子、というように言ってきました。それは、この世界が、「障害」ということばで子どもたちを分けたり、違った目で見たりすることがないように、と考えてきたからです。この子は「～～障害です」、と言えれば何か分かったような気持ちになることへのいましめもありました。「～～障害」と言うことで分かることはほんのわずかなのです。そうした意味で。この「発達障害」ということばを安易に使わないようにしてきました。しかし、最近こうした子どもたちの様々な感覚に焦点を当てた本が続々と出てきています。視覚、聴覚、接触感覚、嗅覚、味覚等々が通常(何を通常というのかということも難しいのですが)の感覚と異なっているのではないか、ということです。そしてこの本では「感覚の発達」という章でこうした点に焦点を当てています。

「はじめに」の中には以下の文章があります。

「最後にひとつ。赤ちゃんの実験の立場からすると、発達障害に見られる個性的な認知とその脳の発達は、『脳の発達と進化』から鑑みて、より進化した形態である可能性も考えられる。そんな世界をのぞいていこう。」

とあります。多くの保育や教育の現場、家庭、社会など今、そうした「進化」に戸惑っていると考えてもいいのではないのでしょうか。

(文 後藤 進)



何かありましたら誰にでも連絡・相談

E-mail olive@kodomo-sekai.com

ホームページ <http://www.kodomo-sekai.jp>

☎オリブ園 018-828-7750

☎放課後等ディサービス・インクル2 018-827-7411